Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2024-06-05

対話の進行を学ぶ ： 「対話技法論」で起きたこと

中川, 雅道

(Citation)
哲学対話と対話学習プログラム:80-107

(Issue Date)
2011-03

(Resource Type)
research report

(Version)
Version of Record

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/90009013

対話の進行を学ぶ—「対話技法論」で起きたこと

中川雅道

1．対話技法論とは

大阪大学で行われているグループワークを中心にした授業「対話技法論」[1]について報告を行う。執筆者は、ティーチングアシスタントとして2010年度の対話技法論の授業準備、授業補助を行った。この演習は、ふたつの目的に向けて作られている。ひとつは「哲学的対話法に触れることで対話を通して考えることを学ぶ」こと。つまり、実際に特定の誰かと話すという経験をしながら、考えること。その中で、「哲学」と「対話」との関係を受講者各々が考察することが求められる。もうひとつは「対話の進行能力を身につける」ことである。しかし、「対話の進行」なるものが形式的にあって、それを学ぶという意味ではない。複数の人々を対話へと導く「進行役」という役割を実践することによって、「進行」そのものを各自が考えることが求められる。様々な場所で哲学的対話を実践する人たちを育てるということが目指されていることもあり、一般の方々を対象にした哲学カフェ、学校の中での対話プログラムなど、受講生の関心に従って様々な場所での実践へと受講者を導くことも、この授業の大きな役割のひとつであると言える。

対話を実際に行うワークが中心になるため、時間的制約は大きい。反省の時間も十分にとるために、月曜日の４限、５限に連続して時間が確保されている（ただし、開講日が隔週であるため、単位は通常の授業１限分と同じ）。また、話すことが中心になるため、人々が集まって話しやすい部屋を選ぶことも重要である。（講義室で行うと、それだけで発話に対する規制が働くことがある)。対話技法論では、ワークショップ等を行うためにデザインされたオレンジショップという部屋を用いている。

対話を行う人々が多様であれば、対話自身を活発にする力になる。2010年度は30名程度の学生が受講し、そのうち半数程度が倫理学専修の学部学生、臨床哲学専門分野の大学院生で、残りの半数が他学部や他研究科の学生であり、受講生は多様である。また、対話を通して考える、対話の進行を学ぶということは、すぐに身につくことではないため、複数回、複数年度の受講が奨励されている。複数年度に跨がって受講する学生が一定数いることで、対話の経験という意味での多様性も生まれる。何度も対話を繰り返すことで、大学を離れて様々な人々と対話をしてみたいという気持ちを刺激する

---

[1] 学部学生は「臨床哲学演習」、博士前期課程の学生は「対話技法論演習」、博士後期課程の学生は「対話技法論特殊演習」という科目名で登録している。以下、対話技法論と呼称する。

ことにもなる。年間スケジュールは以下の通りである。

2010年度「対話技法論」年間スケジュール

前期 4/12 オリエンテーション、リアル／リアルでないを区別する

4/26 対話ゲーム「じっくり考えるのは大事なこと？」

5/10 相互質問法「ぼくたち、みんな平等？」

5/24 NSDの例を挙げるセッション

6/7 テクストを読む（『ふたりはいっしょ』よりクッキー）

6/21 アフォリズムを読む（ニーチェとウィトゲンシュタインの文章からの抜粋）

7/5 絵を見て対話する

7/12 前期まとめ

後期 10/4 イントロダクション 哲学カフェについて／哲学カフェを企画する

10/18 対話ゲーム「人間はなぜ他の生きものの命をうばうのか？」、「あなたは自分を動物だと思うか？」、「じっくり考えるのはなんのため？」

11/1 問答法「クジラを食べてもよいか？」、ネオソクラテス的対話１

11/15 ネオソクラテス的対話２

11/29 ネオソクラテス的対話３

12/13 ネオソクラテス的対話４

1/17 映像を見て対話する（ハワイP4Cのやり方で）

1/24 後期まとめ、対話に用いられる具体物とは？

評価は学期末に課されるレポートによって行われる。対話技法論を受講してどこかで対話を実際に行い、その対話について考察する、あるいは、授業内で対話した経験を活かして、対話編を作成するなど、いずれも対話に関わる内容のレポートが課される。また、様々なワークを実際に行うことが重視されるため、出席点への配点も高い。

２．NSDで起きたこと

今回は11/1、11/15、11/29、12/13に行われたNSD（Neo Socratic Dialogue）を扱う。NSDは、レオ

ナルド・ネルゾンが大学での哲学教育を行う際の方法として考えたソクラティックメソッド[2]を起源に、後代の人々が様々な実践のために加工した哲学的対話法である。10名程度の参加者が、対話の内容自体には関わらない進行役の導きのもとで、自ら哲学的問いを立て、その問いに答えることのできる実際に体験した例[3]をそれぞれ挙げ、参加者の例のうちの一つを詳細に記述し、その例を抽象化することで最初に立てた問いに対する答えを作るという方法である[4]。また、基本的には、NSDの過程は、すべて参加者全員の同意なしには進まない。対話技法論では、以下のようにNSDを行った。

11月1日（1時間半）　メンバー決定、問いを立てて全員で例を出す
1、進行役をNSD経験者の中から4名選ぶ。 2、勇気、尊厳、思いやり、諦めの4つのテーマを掲げ、話したいテーマのところに集まってもらい、6名程度のグループになってもらう。 3、グループでそれぞれ、進行役の導きのもと、問いを全員で立て、ひとりずつ例を出す（問いは、それぞれ「勇気を出すのはどういうときか」「日常生活において尊厳とは何か」「本当に人を思いやるとはどういうことか」「人はなぜ諦めるのか」）。
11月15日（3時間）　例を選び、記述する
1、最も適切な例をひとつ選ぶ（選ばれた例は、電車の中でチェコ人に話しかけた、パチンコ屋の前で寝ていたときに通行人が通った、生徒のためにエアコンをつけた、絵をあきらめてバイクに打ち込んだ）。 2、例を詳細に記述する（だいたい模造紙1枚分くらい）。 3、例の分かりにくいところを質問する。 4、重要なところに線を引いていく。
11月29日（3時間）　例を抽象化し、答えを作る
1、線が引かれた例の一部から抽象化を行い、答えを作る（勇気を出さずに後悔するよりも、勇気を出した結果、願望を満たせず終わる方がましだと思った時など）。 2、NSDを経験してみての感想を次回までにレポートにまとめてくるという課題を課した。
12月13日（3時間）　NSDの反省

[2] ソクラティックメソッドの遡及的抽象、理性の自己信頼については、寺田俊郎「レオナルト・ネルゾンのソクラテス的方法」、『臨床哲学』第3巻、pp. 61-72、2001年。
[3] 例の位置づけについては、桑原英之「何が具体的か？-SDにおける具体例の位置づけ」、『臨床哲学』第6巻、pp. 31-39、2004年。
[4] Kopfwerk Berlin「ソクラティク・ダイアローグの方法論　遡及的抽象…どのように哲学的認識を求め、見出すのか」、樫本直樹・川上展代訳、『臨床哲学』第7巻、pp. 77-104。

1、思いやりグループが、1時間半ほど全員の見ている前でNSDを実演（途中から進行役を本間直樹が行う）。 2、後半の1時間半は、見ていた受講者が様々なコメントを言いあいながら、進行をするとはどのようなことかを話し合った。 3、最後に、レポートの提出。

NSDを、受講者たちが実際に体験する中で、何が変化したのかを描くことで対話技法論という授業の意味を描いてみたい。まず、NSDの際に進行役が作る模造紙[5]から4つのグループのうちの2グループのプロセスを記述することで、NSDの各プロセスが具体的にどのようなものなのかを描く。

3．勇気、尊厳を問う

勇気をテーマにしたグループがどのような流れを辿ったのかということを確認しておきたい[6]。勇気グループは比較的、典型的なNSDの進み方を辿っている。

勇気グループ
問：勇気を出すのはどういう時か。 →「勇気とは何か」という問いが却下され、この問いが選ばれた。……の時に勇気を出した、という例が出しやすい問い。NSDでは「状況がそうさせたから」といった、不分明な判断が含まれる例が出されやすい問いは、その判断の理由を問いにくいため避けた方がよい。 **班員の各例** ・自分のことを忘れているかもしれない認知症の祖父に会いに行った。 ・知らない人に話しかけて仲良くなれた。 ・ブランコから飛びおりた、などの例が出されている。 →最終的にはひとつの例が選ばれるので、余分なプロセスのように見えるが、実は「勇気」をどのようなものとして捉えているのかを参加者それぞれが表現し、互いに受け取るという重要な過程。

[5] 模造紙に書き込むことができるのは進行役のみ。また、基本的には全員に合意されたこと以外は書いてはならない。NSDの進行は、この紙の使い方が非常に重要である。本報告末の【参考資料1】はこの模造紙を文字起こししたもの。
[6] 参考資料1、pp. 95-96を参照。

選ばれた例

電車の中でチェコ人らしき人を見かけたときに、チェコという国に以前から関心があったので、ぜひ知り合いたいと思ったが、相手がチェコ人ではない可能性があり、電車の中なので話しかけると目立つのでためらったが、チェコ人と知り合いになるチャンスを逃したくなかったので、勇気を出して話しかけた。

例から抽象化された答え

「勇気を出さずに後悔するよりも、勇気を出した結果、願望を満たせず終わる方がましだと思った時」。

→「勇気を出す」とは、幾つかの選択の中（例の中では話しかけるか否か）から、「ためらい」のようなマイナスの感情を振り切って、ある選択を選ぶことだということが話し合われた。

次に、尊厳をテーマにしたグループがどのような流れを辿ったのかを確認しておく[7]。このグループは、勇気グループとは少し異なった流れを辿っている。

尊厳グループ

問：「日常生活において尊厳とは何か」

→「尊厳」という言葉が我々の日常の言葉使いではないために、日常生活において何が「尊厳」の発現であるのかということに、混乱があった。そこで、このグループでは「日常生活」における尊厳を問いかけるこの問いが選ばれた。

班員の各例

・大学の先生から連絡が来たが、来なさいとは言われなかった

・仏壇に手を合わせる

・小さい時にアメリカザリガニ／小さいアリを殺していた、などが出された。

→例の記述の中に「尊厳」という言葉が出てこないことからも、このグループは「尊厳」が日常生活のどこで現れるのかということも問いかけていることが分かる。

選ばれた例

パチンコ屋の前で寝ているという常軌を逸した行為を行っている自分が、いわば普通の生活を送っている社会

7 参考資料 1、pp. 97-98 を参照。

的に高い地位を持っている人々から、「ホームレス」のように社会的に低い地位にあると思われる人々と同じような目で見られたことによって、尊厳が傷つけられた

例から抽象化された答え

自分が妥当だと思う扱いを受けること

→周囲の人たちとの落差を感じたときに、自分には尊厳がないと思った、なぜなら妥当だと思う扱いを受けなかったからだ、ということが暗黙のうちに合意されたのではないだろうか。そうだとするなら、尊厳の欠如の理由が問われていたと言うことができるだろう。

4．変化したと言われていること

まず、NSD の授業を通して、何が良いと思われたのかを考えたい。ここから用いる資料は２つ、12 月 13 日の授業後に行われたグループインタビュー[8]と、12 月 13 日に全員に提出してもらったレポート[9]である。インタビューの概要は以下のとおり、またレポート課題はNSD を受けてみて、NSD とその進行について考察せよというもの（文字数は2000 字程度）。

インタビュー概要
実施日：12 月 13 日、授業直後。 実施者：中川雅道。カメラで撮影を行った。 対象：対話技法論受講者に、インタビューを受けてもらえないか授業中に告知し、集まってもらった５名（個人情報をできるだけ消すために、インタビュイーの名前はＡからＥまでの記号を用いることとする）。それぞれ属していたグループは、Ａ：思いやり、Ｂ：尊厳、Ｃ：勇気、Ｄ：勇気、Ｅ：尊厳。 内容：「今日の授業を面白いと思ったか」という質問にひとりずつ答えてもらった（答えていない人は、他の人の答えを聞いている）。その後に「全体の議論のときは発言しにくかったか」「これからNSD を何かに使ってみようと思うか」という質問にもそれぞれ答えてもらった。ただし、分かりにくいところや気になったところがあれば、適宜質問している。１つめの質問は、あらかじめ準備していた質問だが、それ以降の質問は１つめの質問に対する答えを聞いた上で、その場で考えた。 目的：授業を受けた感想や、何を考えながら授業を受けていたのかを聞くため。

8 【参考資料２】2010 年 12 月 13 日に行われた対話技法論後のインタビューを参照。
9 こちらは膨大なので添付することができない。

まず「今日の授業を面白いと思ったか」という質問に対するBの答えを見てみよう。

B：はい、面白かったです。レポートを今日書きました。今日書いたばかりなので、反省点とかあったんですね。皆さんの意見を聞いたら、やっぱり共通点があったりとか、逆に全然違うことが話し合われてて、グループによって多様なんだなって思い、自分のグループは最初順調にいけたほうなんだなって思いました。比べられたのが楽しかったです[10]。

12月13日には、思いやりグループが全員の前でNSDを実演した。それを見た時に、自分のグループのNSDと比べることができたので、同じところと違うところを見つけることができた。多くの参加者が、レポートで書いてきたことを再考することができたという積極的な評価を行っている。しかし、他のグループのNSDを見ることによって発見されたのは、具体的には何だったのか。自分たちのグループは「順調であった」という言葉が気になったので、別の質問をした。

中川：自分のグループの方がやっぱり良かったと思いましたか。

B：すごい難しそうでしたね。自分のグループの方が話しやすかった、たぶん話しやすいと思います。僕があの場にいたらちょっと話せないので。

中川：自分のグループのほうがやりやすかった理由とか分かりますか。

B：理由ですか、今日聞いてたら進行役の人が顔を伺ってたのかなって、そのときは意識できなかったですけど、書きますかって何回も聞いていたし、……[11]。

進行役が気を配り、何度も「書きますか」と確認していたことに、他のグループの進行役を見ることで気づいたのである。つまり、進行役の振舞いの違いが理解されたのである。Bの属していたグループの進行役は、「書きますか」と何度も尋ねることで話しやすい状況を作っていたが、他のグループの進行役はそのことを行っていなかった。複数の進行を見ることには、そのような効果がある。

Bの属していた尊厳グループの進行役は、次のようにNSDの進行について発見があったと報告している。

進行役の役割のひとつは、やはり議論の交通整理をするということである。私が議論中に心がけた

---

10 参考資料2、p. 101を参照。特に断らない場合には、レポートの引用、インタビューの文字起こしからの傍点は引用者によるものとする。

11 同上。

ことは、「質問を促す」「もう一度言ってもらう」「全体に話すようにと注意する」の３つほどである。……NSD の進行をしているときに、その役割のみでは十分ではないのではないかということが思い浮かんだ。……NSD に参加して議論をしている最中、参加者の人々は思い浮かんだことを言葉にし、意見にもっていくことに集中しているため、いままでどのような議論がなされてきたのか、どのように判断してきたのかを忘れてしまっている場合が多々ある。……そんな場合、やはり議論の流れを記憶する要となるのが、進行役のもうひとつの役割ではないだろうか。……「NSD の進行役は黒板の役なのかもしてない……」と感じた。

この進行役が気をつけたのは、初めは議論の交通整理だった。この交通整理が行われていたから、話しやすかったのだろう。しかし、それだけでは不十分ではないかと、この進行役は思った。議論は簡単に流れていき、忘れられてしまう。議論の流れを記憶しておくために、紙に書いていかなければならない。だから、B が述べていたように何度も「書きますか」と繰り返していたのだ。B が気づいたのは、進行役が何度も書いていいかどうかを確認していたということであり、そして、そのような進行役の配慮は、ただ NSD を行っただけでは気づかれにくい。別の進行役との振舞いの違いを見比べることによって、そのような理解が起こる。

D も同じようなことを報告している。

D：面白かったです。何が面白かったかというと、本間さんの裏話[12]が聞けた。NSD を実際にやったときも、進行役がやたら確認とってくるので、この人何考えてんねんやろとか思ったんですが、結局、NSD が終わった後に何考えてたんって聞かないと、推し量るだけでは不十分で、本間さんの話聞いてると、あー、そこまで考えて進行役するんだなと思って、感心してました。たぶん、話とか、相手が喋ってたら、それを聞くことに必死になって、理解しようと思って、他の人に目が向かないと思うんですけど、ずっと発言の少ない人の目を見てましたとか、そういう話は非常に興味深かったです[13]。

推し量るだけでは分からない、進行役の配慮を実際に聞くことで、進行をするとはどのようなことかが理解されることもある。進行役は、他の発言者よりも自分の振舞いに対して自覚的であることが

---

[12] これは、当然、この発言の後半部、12 月 13 日の思いやりグループの進行役を交代した本間が「どうすればうまく進行できるんですか」という質問に「ずっと発言の少ない人の目を見てました」と答えたことを指している。正確に発言の意図を再生することはできないが、NSD では発言の少ない人が議論を理解しているかどうかが重要だという意味だろう。もし、その人が議論を理解していなければ結局時間が過ぎた後に決着のついたはずの議論に戻ることがよくある。また、これまで話していなかった人が、議論の流れを大きく変えることも確かによくある。

[13] 参考資料、p. 102 を参照。

多い。初めてそのような自分の振舞いへの配慮を聞く人にとっては興味深いものとなる。反省を行うことによって、進行を経験した人間の振舞いに対して、説明が与えられる。例えば、進行役の役割は交通整理である、発言の少ない者がNSDでは鍵を握っているなどの説明が与えられる。そのことが、進行役によって異なったり、あるいは同じであったりすることを、発見することができるというわけである。

反省は行われたほうがいい。それも、自分が行ったことをもう一度考え直してみるといった抽象的な意味でではなく、他の人が何を考えながら動いていたのかを聞けるという意味で。対話技法論で起こっていることとは、まずは、「進行をするとはいかなることなのか」が、具体的な振舞いによって理解されるということである。そして、反省の場で、振舞いの当事者が自らの振舞いに説明を加えることで、さらに、なぜその振舞いでなければならなかったのかが理解される。ここに、実践をこなす中で、実践を学ぶということの積極的な意義がある。

5. 発言されなかったこと

ここから少し話はNSD自体から脱線する。前節で肯定的に捉えた、全体で反省を行うことについて気にかかる発言があった。それは、全員の前では話しにくいということである。

C：今日、色んな人の進行役を見て、進行役が違ったら全然、議論の仕方も違ってくるんだなっていうのが分かって面白かったんですけど、私が進行役をほとんどっていうか一回もやったことがないので、進行役うんぬんの話を聞いていてもあんまり実感がなくって、へーっていう、あの最後の方の議論とかはけっこうへーっていうかんじに、なっちゃったかなと思います。

中川：話を聞きにくかったってことですかね。

C：聞きにくかったというか、言っていることはなんとなく分かるんですけど、共感はできない、自分が経験がないので、参加者の、ってか進行役だけじゃなくって参加者側のことももっと今日話し合っても良かったんじゃないかなっていうことを思ったりもして。

中川：それは、喋れなかったですか。

C：あ、今日一回も喋ってないです[14]。

進行役のことにはあまり興味がもてなくて、なぜ参加者側について話にはならなかったのかという

[14] 参考資料2、p. 102を参照。

発言があったときに、なぜそのことが全体に向けて話されなかったのかということに少し引っかかった。先ほどから、意味があることとして言われていた進行についての発言が、興味を持たれないということもある。ここから、少しだけインタビューは発言されなかったことへと向かうことになり、Eの発言によってそのことは明確に言われることになる。

E：いつもに比べたらやっぱりちょっと退屈でしたね。やっぱりワークしてるほうが楽しいっていうのはありますね。やっぱり見てるだけってのはちょっと、いつもに比べれば退屈かなっていうのは感じました。あと、発言ですね。しづらいですね。あの、いつもしづらいです発言は。全体でってなるとね。ワークのときは、余計なことまで喋るけど、やっぱり全体でってなると、やっぱりなんか喋れないってところが、これがなんでかっていうのはちょっと分かんないですけど、でも、やっぱり発言を値踏みされるかんじがするんで、なにしょうもないことって自分でやっぱり反芻してしまうと止まりますね[15]。

あまりにも当然のことかもしれないが、授業はワークをして何かに自ら取り組んでいるほうが楽しい。また、少人数に向けて話すよりも、大人数に向けて話す方が難しい。それでは、なぜ発言がしづらいのかということについて、ここでは理由が挙げられている。発言を値踏みされているかんじがすること。教師が、良い意見であるという形で評価することへの反発と考えることができる。また、そのような評価にうまく乗るか乗らないかということを反芻してしまったときにも、同じように発言できない。

ここで、次の質問を「全体の議論のときには発言しにくいか」にすることに決めた。そうすると、この質問に対してはとりあえず全員が「発言しにくい」と答えた。だが、その発言のしにくさも、また、なぜ発言しにくいのかという理由も異なっている。列挙しておく。

A：全体で話していたとしても、フランクな雰囲気、雰囲気ですね。がっちり講義になると、あー私はやめとこうかなっていう気になってしまうので。わりとみんなで交わしあってるっていう雰囲気だったら、ちょっと気が楽かなって思うんですけど[16]。

B：あの自分が何か言わなあかんなと思うのを覚悟で、挙げましたね。緊張して。言うことを考えないといけない。そうですね、あと、僕は人の話を聞いて、あーそうかって納得するタイプで、あ

[15] 参考資料2、pp. 102-103 を参照。
[16] 参考資料2、p. 103 を参照。

んまり自分でじゃあどうだどうだって考えるタイプじゃないので、どっちかっていったら発言しないんですけど、自分が手を挙げたいタイミングになったら誰かがそれを言ってるよってかんじで[17]。

C：それをなんでかなーと今考えてみたら、たぶん全体の議論のときは何かこうひとつの話の流れみたいなものができているような気がして、全員がその流れに乗って進んでいるようなかんじがあって、自分が発言することによってその流れから外れてしまうんじゃないかなというようなかんじがして、その流れに乗った質問じゃないと、できないですね[18]。

D：あの僕の個人的な話をすると、何かしら言いたいことはあるんです。でも、たいてい、なんか全然、話の流れってさっきおっしゃいましたけど、その流れと全然違うことを考えてるんです。今日だったら、事実と真実ってどう違うんだろうとか。そんなことばっかり考えてるんです。だから、何か言いたいことありますかって聞かれて、もちろん言いたいことはあるんだけど、その、空気読んでいないなと思うんですよ。で、それをひっくり返すほど空気を読めないわけではないので。そういうときに、今この話は一旦終わりにして、今までの話と関係なくてもいいですけど、他に意見はありますかという一言がぽっと入ってくると、ものすごい言いやすいです[19]。

全体に向けて話すということは、基本的に難しいことであって、その障碍にたいして、フランクでない空気、話の流れ、教師と生徒という関係、など様々なことが言われるということは確認しておいていいだろう。どのような場であっても、誰がおこなっても、多くの場合、このような障碍はつきまとう。ただし、前節で確認したような積極的な意味が、大人数で話すことにはある。ひとつ、ありうるのは全体で話すことにも何らかの仕掛けを用意するというのは効果的かもしれない。どのような仕掛けが全体で話す際に有効であるのか、ということは今後考えていきたい。

6．自分の例を出すこと

さて、NSD の話に戻ろう。インタビューの中で、自分の例を出すことを疑問視する声があった。

---

17 同上。
18 参考資料 2、p. 103 を参照。
19 参考資料 2、p. 104 を参照。

C：あとは今日誰かも仰ってたんですけど、やっぱり質問攻めにされる人がかわいそうなくらい焦っているというか、授業が終わった後は疲労困憊というかんじで、……当たり障りのない例を持ち出していたんなら、深く突っ込まれてもいいかもしれないんですけど、ほんまにつらい体験だとか、プライベートなことを最初に出してそれが選ばれて、がーと突っ込まれたらつらいんじゃないかなと、思って、このやり方はどうなんだろうと思っています[20]。

まず、出された例がつらい体験であったか否かということは、進行役が注意深く見ておかなければならない条項である。もし、例を出した本人が未だ腑に落ちていない例や、つらい例（いじめられた経験など）が出されたなら、そのような例を選ぶことは避けられるほうがいい。答えを自ら出すという方法を重んじたワークとして用いる場合には、傷つけられた感情を受け取る装置がないので、非常に危険である。ただ、例を出した人が深く突っ込まれて疲労困憊することは、必ずしもネガティブな側面だけが語られるわけではない。

別のグループの例の提供者は、例が分析された経験を次のように回顧している。「次第に警察の取調べのような雰囲気になってきて、しまいには班員という取調べ係に囲まれて供述をしているかのような錯覚を覚えてしまった」。問いに答えるための例として、自らの経験を語るということは、ふつうに自分の経験を話すこととは異なったことで、疲れる。「……問いただされると、自分の中にそれにきっちりと合う答えがなかったのだが、それに答えなくては供述が一貫しないため、ここまでこの経験談を掘り下げてきた意味が水泡に帰してしまう。」NSD では、明瞭に答えがあると確信して例が出されるというよりも、その例の中に含まれている判断によって、答えが出される。それゆえ、例に含まれる判断を再記述し、例が全員に受け取られるための一貫した記述が必要になる。そのように例が参加者全員に受け取られた時には、すでに答えは出てしまっている。そのとき、例は答えを得るための、共有物になっているのであり、参加者全員に洞察の光を与えることになる。それゆえ、例の記述は参加者全員が理解可能なものにならなければならず、思いがけず厳しい質問に晒され、疲れることもあるだろう。

例を出すことを警察の取調べの過程と比べる人もいれば、例がある共同体に受け入れられた経験として語る人もいる。E は、例を出すことで自分が理解されたかもしれないと感じた。

中川：さっき言っていた、例を出すことでの疲労困憊っていうのは別になかったですか。

E：いえ、嬉々として。こいつらに伝えておかなければ、と思いました。

---

[20] 参考資料、p. 106 を参照。

C：話すことで楽になる方もいるんだなと今思いました[21]。

彼は、例を出すことで疲労困憊したといった経験をしなかった。Eは、自分の例を出すことが二度目だったのだが、レポートの中で一度目に例を出した時の経験を回顧している。「それは自分の日本語能力の低さと、所属するコミュニティーに依るものであったと考えられるが、その中で長く生活する中で、曖昧な物言いに慣れ、それが正しいんだ、とまで思いこんでいたのかもしれない。しかし、同じ経験について話していても、使われる言語の射程の短さによって、その正確さによって、大ざっぱな分節では見えなかったものが現出してきた」。普段話している人たちとは異なった言葉を操る共同体に、自分の例が受け入れられた時の驚きについて、彼は語っている。そして、異なった言葉で自分の例が受け入れられたと感じた。例に含まれるプライバシーの感覚は、それが受け入れられるにせよ受け入れられないにせよ、参加者たちの大きな関心事であって、NSDの過程の中で最も注目を受けるひとつはやはり、例を出す時の例が、自分の例であるという強い感覚であることは、そのとおりなのだろう。

7. NSDを支えるものは何だろうか？

このようにNSDにおける例は、プライベートすぎて疲れるもの、受け取ってもらいたいものとして両義的に捉えられていた。NSDを支えているのは、例である。そして、おそらく例がどのように受け取られるかということが、NSDの最も大きな特徴なのである。自分の例を出さなければならないことに反発を覚えていたDは非常に興味深い経験をした。

D：僕は前から相互質問法は好きだけれども、NSDだけは分からないって言って、ずっと嫌な気がしていたんですけど、今回NSDをやってみて、NSDの良いところが自分なりに見えて。いちいち合意を取るじゃないですか。そうすると、なんかね、気が楽になるんです。みんなが決めたことなんだから、最終的に問題が生じたらお前ひとりを攻めることにはならないだろう。責任をみんなで丸かぶりするっていう、それが、ものすごく話しやすいっていうことに気づいて。……人の経験についてああだこうだと言うのは、みんなで決めるっていうことを信頼できるのならば、あの、簡単なことなんです。だから、そこをレポートにも書いたんですけど、自分のことを棚に上げて、人のことをああいう、こういうっていうのは楽なんだな。今までなんで話しにくかったのかっていうの

---

21 参考資料、p. 107を参照。

は、自分の具体例を出したり、自分の言葉で物を説明したりするっていう、その責任感を引き受けるっていうことが、自分なりにできていなかったから、その覚悟がなかったから、なんかNSD嫌だなって感じてたんではないだろうかって[22]。

NSDを体験することで彼が見つけたものとは何だったのか。それは、もちろんNSDでは、参加者全員の同意がなければ、先に進めないことであり、ここまで進んできたということは、ここまでは同意が成立してきたということである。だから、その合意に関しては、結果正しくても、間違っていても、全員がその責任を分け持っていることになる。彼の発見は、だから話しやすいということだ。彼はこれまで、自分の例を出して、それについて説明することは、自分の責任においてしか語られてはならないと考えていた。それが、自分のことを棚にあげて（これは誤解されやすい表現だが）、語ることができるようになったというのだ。背景には、自分で出した例は、自分の例なのだから、自分がその例について最も正しく判断できなければならないといった重圧感が見える。

もう少し、この声に耳を傾けてみよう。彼はレポートで、ある印象的な場面を記述している。彼はある瞬間まで、出された例に対する十全な説明はその例を出した人だけが行うことができると考えていた。ところが、その例の提供者自らが、その例を如何に説明するかということの吟味に、他の参加者と対等な者として話だしたと言う。「A（例の提供者）の発言を聞いた瞬間、私は行方の知れない漂白の旅に出たような、途方もない茫漠感を抱かずにはいられなかった。Aは他の参加者との対話を通じて、自身の経験を適切に表現する言葉を探している……他方でA自身が問いへの答えを未だ（程度の差はともかく）見ていないということでもあると思われたがゆえに、頼ることの出来る最大の道標を失ったように感じてしまったのである」。例の提供者自身が知っていることを、繰り返すことがNSDの眼目ではない。例は提供者の手から一旦離れ、全員の合意というところへ渡されることになる。その洞察が、彼に次のような言葉を語らせる。「参加者全員で、逐一、『合意する』こと。皆で『合意』した、というそのことが、先の茫漠感や心許なさをやわらげてくれるような気がした。思えば頼れるものは例の提供者だけではなく、共に吟味を行う参加者すべてであり、参加者すべてでしかない、ということは当たり前といえば当たり前であったと、NSDを終えてから痛感することとなった」。問いに対する答えとして、全員の合意のもとで例が選ばれたとするならば、その責任のもとで例は説明される。また、答えが出されるのもまた、全員の責任のもとである。そのことを彼は「安心して話せる条件」とも言っている。

---

22 参考資料、p. 106。

8．おわりに

ここまで、様々な資料の中から対話技法論を受講した学生が何を思ったのかを描いてきた。まず、5節で授業の中で全体に向けて話しにくいことを殊更に取り上げたのは、対話型の授業を20人以上に対して行うとき当然起こる事態だと思われるからである。原因を明らかにし、対策を行うことも重要かもしれないが、今回はそのように脅かされやすい全員での議論を可能にするものは何かということを考えてみたつもりである。

4節で述べたように、対話技法論における多くの発見は、(1)自らワークに取り組み、他の人たちの振舞いを知る、(2)反省の中で、その振舞いが自覚化され、その意味が語られることによって起こる。これは、ふつうの意味での教育、何らかの情報が教師の側から提示され、それを知るというモデルとは異なっている。議論することを「こう議論せよ」という形では教えないということである。しかし、発見のプロセスとして全員での反省が含まれているのだから、全員に向ける発言が規制されないようにするということは重要である。そのためには何が必要なのか。

ワークのひとつとしてNSDを考えるならば、そのワークの中で発見されたことが全体の議論に反映されるということが最も自然なことではないか。6節で述べたように、NSDで注目されることが多いのは、例に含まれるプライバシーの感覚である。同時に、そのプライバシーの感覚は全員に受け取られることが難しいこともあれば、そうでないこともある。7節では、そのプライバシーの感覚を受け入れるようにするための基盤が、NSDで必要とされる全員の「合意」が「全員の責任」と理解されることではないか、と述べた。そして、それが安心して話せる条件ではないかということも。NSDで理解される必要のあることが、自分のものである例を全員の責任のもとで吟味することである。そのことは、私自身NSDを何度も繰り返した経験から納得することができる。そして、その理解が全員の前で話す際にも我々の助けになるのではないか、それが今回資料をまとめながら考えたことである。また、そのことは実はすでに対話技法論の中で発見されているし、それこそが対話技法論の意義ではないかと思われるのだ。

途中、こんなことを述べた。全員で話すことを促すような仕掛けを考えることが必要だ、と。例えば、NSDでは模造紙という具体的なものに、議論を可視化することによって議論の全体が見えやすくなる、ということが確かにある。NSDで理解されるような全員の責任のもとでの議論ということを可視化する具体物とはどのようなものか、という問いかけを今後の課題として、この原稿を締めくくりたい。

【参考資料1】NSDで使用した模造紙

勇気グループ

問い／答えシート

問「勇気を出すのはどういう時か？」

勇気を出さずに後悔するよりも、勇気を出した結果、願望を満たせず終わる方がましだと思った時。

各例シート

・自分のことを忘れているかもしれない認知症の祖父に会いに行った。

・ 知らない人に話しかけて仲良くなれた。

・ ブランコから飛びおりた。

・ 怖そうな犬のそばにころがった友達のクツを取りに行った。

・ 財布を取り返すため、スリに暴行を加えた。

例の記述シート1

今年の１０月、初めのころ、阪急宝塚線の電車内、夜７～８時位、社内は静かだった。５０位の外国人（ハーフパンツ、ハイカーっぽい姿、小ぎれいではない）が、ガイドブック片手にすぐ近くにいた。その人が路線図を見ながら困っているようだった。また、その人の持っていたガイドブックが、チェコ語で書かれているっぽかった。電車内は静かで、座席が全て埋まるほどは人がいて、その外国人に英語で話しかけると注目を集めそうでためらわれた。※１また、英語が通じなかったらどうしようかという考えもあった。前から、チェコにとても関心があった。話しかけられないまま、二駅すぎた。この時、自分と話しかけやすい距離ではなくなっていた。(自分とその外国人の間に人がいた)

例の記述シート2

もしこのまま話しかけなかったら、チェコの人と知り合うチャンスを逃すと思った。(チェコ人と知り合いたかった）かつて（二年近く前）チェコに旅行に行って、人や風景に感動して以来、文化などに関心を持ち、また行きたいと思っていた。降りる駅がわかるか尋ねたら、「わかる」と言われた。このまま会話が終わってしまうのは嫌だったので出身国を尋ねた→チェコだった。※2チェコだとわかって、めっちゃテンション上がって、大声を出してしまった。人目が気にならなくなっていた。チェコ談義で盛り上がって別れた。彼はチェコの大学の教授だった。名刺をくれた。

抽象化シート1

・チェコ人と知り合うチャンスを逃すと思ったから、勇気を出した。

・リスク（マイナスの面）がなければ、「勇気を出す」とは言えないので、ためらうような状況が重要。※1

・上の二つの要素がなければ、勇気を出したとは言えない。

・この例においては「勇気を出す」→「話しかけて対話する」を指す？（保留）

・「知り合いたいという気持ち」※2と「状況によるためらい」※1

・『知り合いたいという気持ち』－「話しかける」ことをイメージする－『ためらうような状況』であることに気づく－「知り合えない」－「話しかけない」ことをイメージする　『チェコ人と知り合うチャンスを逃したくない』と思ったから話しかけた。（＝勇気を出した）

抽象化シート２

・「困っているチェコ人らしき男」（周囲の状況）から『知り合いたいという気持ち』が生まれる。

・話しかけて、相手がチェコ人でないという残念な結果に終わっても（外国人であることは確実で、少なくとも外国人と話すことができるので）後悔はしない。話しかけなかったら後悔（チェコ人と知り合うチャンスをスルーした後悔）しただろう。

・チェコ人らしき男がいた　→周囲の状況

・チェコ人と知り合いたい　→願望・欲望

・チェコ人でないかもしれない　・目立つ　→マイナス

尊厳グループ

問い／答えシート

問「日常生活において尊厳とは何か？」

答　自分が妥当だと思う扱いを受けること。

各例シート

・大学の先生から連絡が来たが、大学に来なさいとは言われなかった。（大学に行っていなかったとき）

・私は毎朝仏壇に手を合わせる。

・３才ぐらいのとき、ありを殺してたが、大きいありのみを殺していた。「家族に殺してはいけない」と言われた。

・小学生のとき、アメリカザリガニを殺して遊んでいた。でも、ニホンザリガニは逃がしていた。

・小３のころ親しい友達が一部の同級生からいじめられていた。自分もいつのまにかいじめに加わるようになっ

ていた。その後突然いじめはやめた。

・パチンコ屋の開店待ちで、寝袋で寝ていたとき、通勤・通学の人々が横を通りすぎた。

例の記述シート

五年ほど前、パチンコ屋の新規オープンの整理券をもらうために前日の夜から高校の後輩２人と寝袋で寝て並んでいた。朝になって、通勤・通学の人々が横を通り過ぎて行った。自分たちと通行人の落差を普段より強く感じた。なぜなら、普段から朝早くから並んではいるが、寝ているという常軌を逸した行動と本人が感じていたことにより、社会との距離感を強く意識せざるを得なかったから。また、そこは実家の近くで、地元の世間体も気になった。

抽象化シート

・やっていることがいいことだとは思っていない。

・ホームレス、自分、通行人の人々の対比。

・当時「ホームレス」というのが転落の象徴だった。

・一緒に並んでいる人の中に自分よりモラルのない下の人間がいると思っていた。

・そんな人たちと一緒にされたくなかった。

・通行人とはちがって、自分のやっていることに肯定感をもてないと思っている。

・がんばれない堕落している自分に理由をつけるために自由とか儲かっていることをもちだす。

・自分が妥当だと思う扱いを受けること。

・自分がホームレスを見たときと同じような感情で通行人から自分が見られているのではないかと考えた。

・自分は同業者たちよりマシだと思ってほしいのに、上の人間から見ると一律に見下されているのではないかと感じた。

・自分の中に見下す自分と見下される自分がいることが前提になっている。

・自分が欲しているような扱いと実際にされた扱いがズレるときに尊厳を意識する。

・尊厳に気を払わない←日常生活

・尊厳をもちだすのは「尊厳が傷ついた」方である。

思いやりグループ

問い／答えシート

問「本当に人を思いやるとはどういうことか？」

合意事項

・本当の思い遣りは邪念に関わっている。

・思いやりには２つの相がある。２つの相とは、「意識される」「意識されない」のことである。

各例シート

・自分は付き合っていても構わないが、相手のことを思いやって、交際相手に別れを告げた。

・授業が始まった時に、生徒が暑そうだったので、エアコンをつけた。

・電車の中で座席に座っていた時に、目の前にお年寄りが立っていたので、座っていたいという気持ちを抑えて、席を譲った。

・家庭教師で生徒を教えている時、生徒が偶然答えを当てたが、過程が間違っていたので、やり直させた。

・蛇にかまれて死にかけている仔猫を見て、自然の摂理に関与しないのが、本当の思いやりだと思った。

・知り合いと食事中、青のりが前歯に付いているのに気付き、それを指摘した。

例の記述シート

あれは初夏の昼前だった。私立中学２年生の４５名のクラスで国語の授業を始めようとしていた。教室に入ると、調子に乗ったタイプの生徒３名ほどが、暑いと言い出した。明確なセリフを覚えていないが、エアコンをつけてほしいという要求だと理解した。自分自身つけても良い程度に暑いと感じていて、３人以外の生徒も暑そうだったので、エアコンをつけた。常勤の先生方はまだつけていなかったので、怒られるかもしれないと思った。

抽象化シート１

・この中に、判断、察し、覚悟といった異なる内的状態が含まれている。(つけたという行為の直接の理由が「暑そうだ」ということを察したこと)。

・つけた方が授業がよくなるというよりかは、生理的に暑いという理由のほうが大きかった。

・大多数の生徒が暑そうにしていた。教室全体の雰囲気としてみんな暑そうにしているということが容易に感じ取れる状況だった。

・１、自分が暑い、２、３名ほどが暑いと言い出し、エアコンをつけてほしいという要求だと理解した。３、教室内の大多数が暑そうにしていた。この三つの中では３が一番重要だ。

(下線部の抽象化)

その時点でわかることから、全員にとって最適なことをする。

自然に行為と認識が一致している。

全員が暑いと感じているという認識とエアコンをつけるという行為。

両者がいわば最適なつながりをもつという判断を行う段階が必要である。

思いやりという以上は、相手への何らかの配慮が必要ではないか。

配慮とは、なれれば必ずしも明瞭な形で認識されるとは限らない。

抽象化シート２

相手にとってプラスになることをしようという意識

配慮とは熟練したドライバーの安全確認。意識されない配慮の相（層）もある。

意識されてるものとされてないもの両方含む。

中でも意識されてないものをより上位とする。

思いやるという広い概念の中には、意識されているものとされていないもの両方が含まれ、

A「本当に」がついた場合、意識されていないものだけを指すという整理の仕方が可能ではある。（これを答えにするコース）

B ただし、「本当に」がついた場合であっても、意識されているものとされていないもの両方を含むという整理の仕方も可能である。（解釈やり直しコース）

C そもそも、例が「本当の思いやり」を示すものとして適切でなかった。

B の場合、（利己的）邪念の有無で「本当に」かどうか決まる。

諦めグループ

問い／答えシート

問「人はなぜ諦めるのか」

代わりのものが見つかった　目標達成できないと思った　目標に対する愛情、情熱がなくなった　「目標に対する情熱が失われたから」

各例シート

・私は今年新たな趣味ができたので、それまで打ち込んでいた絵を辞めた。

・１０月２８日、私はテレビを買おうと思っていたが梅田のヨドバシ電機でテレビコーナーの値札を見て金銭的理由からテレビを買うのを諦めた。

・去年の１１月に私は好きな人に彼女がいるのを知って付き合うのを諦めた。

・私は中学３年生の修学旅行を、中学１年生のときの大病（慢性病）が怖かったので、行くのを諦めた。

・私は今年の夏休みに一人旅に行こうと思っていたが、時間が作れなかったので行くのを諦めた。

例の記述シート

私は去年の秋にバイクに対する興味をもつ。(先輩に乗せてもらった)。この頃は絵に対する愛情はまだ健在だった。今年の春にバイクの免許を取った。この頃から絵に対する愛情が揺らぎ始めるが、これは自分がスランプで（去年の冬から）絵を描けなくなっていた（5月ごろ）ため。バイトをしてバイクのお金を貯めていった。スランプがなおる兆しがなかったため、相対的にバイクに対する期待が高まっていく。そして絵への愛情はうすれていった。先日、バイクを購入した。絵に対する愛情はなくなってしまった。絵を諦めて（目標・課題から趣味に切り換えた＝頑張るのをやめた)、バイクに打ち込んでいこう（ただの趣味ではなく、課題や目標として）と思った（→自覚した)。

抽象化シート

絵を諦めて、バイクに打ち込んでいこうと思った。

・スランプから立ち直れなかったから。

・絵に対する愛情がなくなったから。

・納得のいく絵が描けそうにないから。

・バイクが楽しいから。

・バイクの目標は達成できそうだから。(日本一周キャンプツーリング)

・バイクに乗っているうちに絵の代わりになると思ったから。

私はスランプから立ち直れず、絵に対する愛情がなくなっていった。失われた愛情の行き場が、以前から興味を持っていたバイクへと向かい、さらに楽しさを見出し、目標もできた。それによってさらに絵に対する愛情が失われ、バイクが絵の代わりになると思うようになった。結果、絵を諦めるに至った。

【参考資料2】2010年12月13日に行われた対話技法論後のインタビュー

中川：それじゃあ質問をしていくんですけど、順番に答えていってください。一個目は、今日の授業面白かったですかっていう質問です。

A：はい、面白かったです。私は前でデモンストレーションした班だったんですけど、なんか振り返りとか、あと別の可能性とかが考えられて面白かったです。

中川：なるほど、別の可能性っていうのは？

A：別の可能性というか、まぁ課題ですか。前によく話し合えてなかったところと、あとここはスキップしてたなっていうところが分かって、そういうのを考えたら、どん詰まりになるかもしれないけど、そうじゃないかもしれないっていうところがあって。

中川：みんなの前で、僕らがやってた対話の改善点ですよね。

A：そうですね。

中川：どう良くなると思いましたか。

A：そうですね。どう良くなるというよりは、より詳細に検討できるんじゃないかって思いました。ちょっと時間のこともあって駆け足だったかなっていう風な印象がありましたので。

中川：じゃあ、次いきましょうか。

B：はい、面白かったです。レポートを今日書きました。今日書いたばかりなので、反省点とかあったんですね。皆さんの意見を聞いたら、やっぱり共通点があったりとか、逆に全然違うことが話し合われてて、グループによって多様なんだなって思い、自分のグループは最初順調にいけたほうなんだなって思いました。比べられたのが楽しかったです。

中川：自分のグループの方がやっぱり良かったと思いましたか。

B：すごい難しそうでしたね。自分のグループの方が話しやすかった、たぶん話しやすいと思います。僕があの場にいたらちょっと話せないので。

中川：自分のグループのほうがやりやすかった理由とか分かりますか。

B：理由ですか、今日聞いてたら進行役の人が顔を伺ってたのかなって、そのときは意識できなかったですけど、書きますかって何回も聞いていたし、今日はご自身でも言っていたんですけど、二回目、ちょっと自分の中では無法地帯だったなっていうことを思っていて、チームの方もそれは共感していたし、っていうのですね。

中川：じゃあ、次に回しましょう。

C：面白かったところと面白くなかったところがありました。面白かったところは、色んな方の進行役のやり方が見れて、私は勇気の班だったんですけど、三週間ずっとやってて、私の中でNSDの進行役は自分のグループの進行役のかんじで、今日、色んな人の進行役を見て、進行役が違ったら全然、議論の仕方も違ってくるんだなっていうのが分かって面白かったんですけど、私が進行役をほとんどっていうか一回もやったことがないので、進行役うんぬんの話を聞いていてもあんまり実感がなくって。へーっていう、あの最後の方の議論とかはけっこうへーっていうかんじに、なっちゃったかなと思います。

中川：話を聞きにくかったってことですかね。

C：聞きにくかったというか、言っていることはなんとなく分かるんですけど、共感はできない、自分が経験がないので、進行役だけじゃなくって参加者側のことももっと今日話し合っても良かったんじゃないかなっていうことを思ったりもして。

中川：それは、喋れなかったですか。

C：あ、今日一回も喋ってないです。

中川：もうちょっと参加者が言えば良かったんじゃないかってことですね。

C：参加者側のほうにも注目して議論したかったかなと思いました。

中川：わかりました。ありがとうございます。

中川：じゃあD君、いきますか。

D：面白かったです。何が面白かったかというと、本間さんの裏話が聞けた。NSD を実際にやったときも、進行役がやたら確認とってくるので、この人何考えてんねんやろとか思ったんですが、結局、NSDが終わった後に何考えてたんって聞かないと、推し量るだけでは不十分で、本間さんの話聞いてると、あー、そこまで考えて進行役するんだなと思って、関心してました。たぶん、話とか、相手が喋ってたら、それを聞くことに必死になって、理解しようと思って、他の人に目が向かないと思うんですけど、ずっと発言の少ない人の目を見てましたとか、そういう話は非常に興味深かったです。

中川：裏話ですね、さっき出た意見をそのまま質問するんですけど、進行役の経験がないので、分かりにくかったとか、話が聞けなかったみたいなことはありましたか？

D：僕は逆に、進行役の経験が全くないんですよ。皆無なんですよ。だから逆に、あーそういう考え方もあるのかって納得できましたね。中途半端にやった経験があると、自分の実感と違うなっていうのが出ると思うんですけど、そこはもう、完全に想像の世界だったので。

中川：なるほど、分かりました。

E：いつもに比べたらやっぱりちょっと退屈でしたね。やっぱりワークしてるほうが楽しいっていうのはありますね。やっぱり見てるだけってのはちょっと、いつもに比べれば退屈かなっていうのは感じました。あと、発言ですね。しづらいですね。あの、いつもしづらいです発言は。全体でってなるとね。ワークのときは、余計なことまで喋るけど、やっぱり全体でってなると、やっぱりなんか喋れないってところが、これがなんでかっていうのはちょっと分かんないですけど、でも、やっぱり発言を値踏みされるかんじがするんで、なにしょうもないことって自分でやっぱり反芻してしまうと止まりますね。

中川：この意見を聞いて、手を挙げにくかったかどうかを以前に高校生に聞いたことを思い出しました。全体の議論のときには、発言しにくかったですか。

A：手を挙げにくいというのは、発言を自らしにくいかということですよね。全体の時は、基本的に私は話すのが得意じゃないんですけど、全体の時にはけっこう威圧感があるような気がします。

中川：もし思いつけば、こうすれば良くなるかもなっていうことはありますか。

A：そうですね。全体で話していたとしても、フランクな雰囲気、雰囲気ですね。がっちり講義になると、あー私はやめとこうかなっていう気になってしまうので。わりとみんなで交わしあってるっていう雰囲気だったら、ちょっと気が楽かなって思うんですけど。

中川：次いきましょう。

B：自分が自ら発言をしたいときに手を挙げる以外にも、NSDが初めてだった方いらっしゃいますかと聞かれたときにも、僕は手を挙げづらかったですね。あの自分が何か言わなあかんなと思うのを覚悟で、挙げましたね。緊張して。言うことを考えないといけない。そうですね、あと、僕は人の話を聞いて、あーそうかって納得するタイプで、あんまり自分でじゃあどうだどうだって考えるタイプじゃないので、どっちかっていったら発言しないんですけど、自分が手を挙げたいタイミングになったら誰かがそれを言ってるよってかんじで、いつもはそうなんで。

中川：ということは、別にフラストレーションは感じないんですね。

B：そうですね。全然そういうことはないです。

C：私はグループのときはわりと喋るほうなんですけど、全体の時はすごく発言しにくくって、なんか気になることがあっても発言できないまま終わることもあります。で、それをなんでかなーと今考えてみたら、たぶん全体の議論のときは何かこうひとつの話の流れみたいなものができているような気がして、全員がその流れに乗って進んでいるようなかんじがあって、自分が発言することによってその流れから外れてしまうんじゃないかなというようなかんじがして、その流れに乗った質問じゃないと、でき

ないですね。

中川：それでさきほど言っていたように、参加者側からの意見が少なかったので発言しにくかったんですね。

C：はい。今日も進行役、進行役の話ばかりで、そういう流れになっているのに、でも私は参加者としてあのNSDも参加していたから、参加者側からの意見しか言えないわけですよ。でも、進行役の話ばかりしていて、そういう流れになってるから、手を挙げて発言するのはその流れを阻害するかなと思って終わってしまったようなかんじです。

D：あの僕の個人的な話をすると、何かしら言いたいことはあるんです。でも、たいてい、なんか全然、話の流れってさっきおっしゃいましたけど、その流れと全然違うことを考えてるんです。今日だったら、事実と真実ってどう違うんだろうとか。そんなことばっかり考えてるんです。だから、何か言いたいことありますかって聞かれて、もちろん言いたいことはあるんだけど、その、空気読んでいないなと思うんですよ。で、それをひっくり返すほど空気を読めないわけではないので。そういうときに、今この話は一旦終わりにして、今までの話と関係なくてもいいですけど、他に意見はありますかという一言がぽっと入ってくると、ものすごい言いやすいです。

E：ちょっと今Dくんが言ったことと変わるんだけど、完全に言いがかりっぽいかんじになるかもしれないんだけど、あのやっぱり、質問したときにやっぱりそれを教えている側が評価しているかんじはするんです。良い質問だとか、そういうことを言っている気がするので、やはり止まってしまうところはあって、でもそれは結局全体の流れっていうことなんですけど。

中川：どうすれば良くなるとかありますかね。

E：それは、そういうことがあるんだって言えばいいんですよ。色んな嫌なことがあるかもしれないけど、それでも喋ろうっていうほうが、僕みたいな人間はですよ、みんながそうかどうかは分からないですけど、なんか嘘くさくフラットですって言われるよりかは良いです。

中川：最後の質問です。これから、NSDを何かに使ってみようと思いますか。

A：そうですね、NSDって具体例から考えていくんですよね。なんかそれっていうのは、抽象的なことから考えていくとなんでも自分って言うことを抜きにして考えていってしまうという傾向があると思うんですね。自分の責任はなくって、でも共有されている一般的なものっていう風に自分の責任から逃げちゃうっていうか、そういう感じがしていて、具体例ということであれば、例の提供者でなければ、関与するっていうことなんですけど、他人の例に、でもそういうことっていうのが、すごい具体的なことから、こう綿密に思い出していって、一般化できたねっていう道筋が、なんて言うんでしょうね、

自己反省的というか、私は精神病というか、精神を病んでしまったひとのことを少しやっているので、そういう振り返りにも使えるというか、あの考え方としては当てはまるのかなと思います。今日もレポートを書いてたんですけど。振り返りながら、個人の責任とか、存在とかということを考える時に、なんか重要なことだなと思っていました。

中川：僕もいろいろと使ってみようと思っているので、それはかなり面白いと思います。

B：はい、実はあの、もう試してみまして。ダンスをやってるんですけど、チームがあるじゃないですか、でも目指すのはみんなひとつの作品なので、なんか一人でもコンセプトとか違うのがあったら、良いものができなかったり、進み具合が悪かったりするんですけど、一番最初にすごい時間をかけてこれをやることによって、最初の理念がすごい固まって、すごい進行のスピードが速かったり、後戻りとかしなかったりして、最初に時間かけすぎちゃうとか言われてたんですけど、今のところみんなが納得できるものはできてるんじゃないかなと思っています。

C：今回、自分でやっていて楽しいことは楽しかったんですけど、NSD の問題だなと思うところばっかりが見えてきたような気もして、この先やるかどうかと言われると、全くやる予定はないんですけど、そのNSD で問題じゃないかなと思ったところが、言って良いですか。

中川：どうぞ。

C：具体例から一般化するじゃないですか。でも、その一般化というのが、参加者５人だったら５人の合意がとれたっていうだけで、やっぱり一般化できましたっていうのはどうなんだろうと思っていて、もし偏った考え方の人が５人集まって、その偏り方が同じ方向に同じくらい偏った人たちの合意によって、はい一般論ができましたって言う風になるんかなって思いました。あとは今日誰かも仰ってたんですけど、やっぱり質問攻めにされる人がかわいそうなくらい焦っているというか、授業が終わった後は疲労困憊というかんじで、先週終わった後に、私の班で質問攻めにあっていた例を出した人におつかれさまでしたって言ったら、はいおつかれさまでしたみたいな、ほんまになんか疲労したっていうかんじの反応をされていて、あの私は自分の例が選ばれたことはないんですけど、選ばれたらこれつらいだろうなって思って、しかも当たり障りのない例を持ち出していたんなら、深く突っ込まれてもいいかもしれないんですけど、ほんまにつらい体験だとか、プライベートなことを最初に出してそれが選ばれて、がーと突っ込まれたらつらいんじゃないかなと、思って、このやり方はどうなんだろうと思っています。

中川：その２つが問題なんですね。それはそう思います。人がいっぱい集まって、みんなで合意をとろうっていうときには、怪しいんじゃないのと思ってしまうわけですよね。例を出すのがつらいというのは、

Aさんの意見と真っ向から対立していると思うんですけど、難しいですよね。

C：その例が、認知症で自分のことを忘れているかもしれないおじいちゃんに会いに行くという勇気を出したという例を出した人がいたんですけど、それは客観的に見て、すごく、それも結局行っても、忘れてたらしくって、自分のことを。すごくつらかったんじゃないかなと思って、私は質問する側だったんですけど、全然深く聞けそうにないなと、思ってしまったんです。もしこの例が選ばれたら、遠慮しちゃってあんまり聞けないかなと思ったりしたんで。

中川：それは一応、形式的には、進行役が確認しなければいけない条項なんですよ。その例を出すことで、その人は傷つかないかっていうことは、かなり細心の注意を払って見ないといけないんです。

D：僕も同じ班だったんですけど、そこ、本間先生がちゃんと確認していました。で、例を出した人は全然大丈夫と答えていたんです。でも、僕はそらそうやけど、と思った。だから僕はあえて選ばなかったんですけど。

中川：合意をする場合にもそうですけど、はい、分かりましたというのは様々な意味になり得ますよね。ずっと見た上で、これはやばいなと思ったら、僕は回避しますね。直接それには触れないで、別の例の方がいいんじゃないかという提案をすると思います。そこはちゃんと見ておかないといけないとは思いますね。

中川：じゃあ、次にいきましょうか。

D：僕は前から相互質問法は好きだけれども、NSDだけは分からないって言って、ずっと嫌な気がしていたんですけど、今回NSDをやってみて、NSDの良いところが自分なりに見えて。いちいち合意を取るじゃないですか。そうすると、なんかね、気が楽になるんです。みんなが決めたことなんだから、最終的に問題が生じたらお前ひとりを攻めることにはならないだろう。責任をみんなで丸かぶりするっていう、それが、ものすごく話しやすいっていうことに気づいて。今まで何が嫌だったと感じていたかというと、自分の経験が思いつかないっていうときに、何も喋れなくなるような気がしていて。それで、なんで具体例なんか出すんやろと思っていたんですけど。そこをちょっと一旦抜きにすると、人の経験についてああだこうだと言うのは、みんなで決めるっていうことを信頼できるのならば、あの、簡単なことなんです。だから、そこをレポートにも書いたんですけど、自分のことを棚に上げて、人のことをああいう、こういうっていうのは楽なんだな。今までなんで話しにくかったのかっていうのは、自分の具体例を出したり、自分の言葉で物を説明したりするっていう、その責任感を引き受けるっていうことが、自分なりにできていなかったから、その覚悟がなかったから、なんかNSD嫌だなって感じてたんではないだろうかって。だから、合意を取るっていうのが、ポイントなんだと思いました。それでずいぶん話易くなったと思います。

中川：その通りだと思います。何か深く納得しました。

E：例を僕、二回連続で出しているんですけど、だから何って言うのは、まぁ、どっかでやるかっていう質問でしたよね。やってみたい気はするんですけど、言語能力の差っていうのに縛られている面がすごく、非常にあると思いますので、僕はやっぱりそういう参加者の抽出の仕方が好きになれない。能力で抽出しなければならないので。うーんでも、言葉以外ではコミュニケーションできないから、これが悪いとも思わないですけど。どうしても、言葉に長けた人が一段降りるようなパターンだと思うので、よく分からないですけど、何が言いたいのか。

中川：そこになんか嫌なかんじがする？

E：そこに何か不快なものを感じてしまう。でもまぁ例を出して、これを、自分を理解してもらえるような気にはなるんですよ。

中川：さっき言っていた、例を出すことでの疲労困憊っていうのは別になかったですか。

E：いえ、嬉々として。こいつらに伝えておかなければ、と思いました。

C：話すことで楽になる方もいるんだなと今思いました。